

## 特集 2 主要都市のアメニティ特性

# 火山性地形と 共生するエクメーネ、鹿児島市 —アメニティへの特権を読み取る—

鹿児島大学工学部教授 松井宏方

アメニティとは一般に快適性を指して言われている。それが何についての快適性であるかと言う事になると検討の余地がありそうだ。

ラテン語の *amoenitas* 魅力あること、甘美・優美、快適に由来する。*amenità* (伊), *aménité* (佛), *amenity* (英) 等に共通する意味は「気候、風土の温和さ、」ということで三者の一致した解釈である。特に興味を惹くのは、伊語、佛語においては、(主に視覚に訴えて)、(見た目に)、快い、楽しい、心地よい(場所や風景)とはっきり記述されている事であって、これが英語になると、(建物、土地に)住宅(地)として価値を添えるもの(建物の様式、衛生的環境、周囲の景観など)という説明がはっきり付け加えられていることである。

さて、このような辞書からの知識は、今日唱えられているアメニティというものの内容をはっきりと分類してもれなく伝えているように思われる。

- I) 気候風土の快適さ。
- II) 視覚的に訴えてくる快適さ。
- III) 人間が居住する空間の物理的快適さ。
- IV) 学術的見地からの地域の特性を受容する市井的快適さ。

\*筆者が付け加えた項目

県都、鹿児島市に限定してアメニティの様々な次元にわたって述べることになるのだが。

気候を一口に云えば蒸暑地域に属する。またヤブツバキに代表される照葉樹林帯に此の

都市は位置している。

鹿児島市を概観する時、最も特徴的な対象はその地勢に見られる。人口50万余を有する都市の近傍に桜島の如き常時活動している火山のある居住地域は世界にも珍しいと言われている。実際、都心は火口から8~10kmという距離にある。次に眼前に灰を噴き上げ続ける桜島の親について少しばかり話を及ぼさないと鹿児島市の位置する地形状の特徴を詳らかにすることはできない。これはつとに自然科学に関する事柄であるが、その応用面に携わる工学関係の分野においても、そのディテールに及ぶ前に心得ておくべきマクロ的事象であろう。

九州には大規模のカルデラが存在することで有名である、阿蘇、霧島の加久藤、鹿児島湾の生成にかかわる始良と阿多(指宿)、そして南海の鬼界のカルデラ群である。

阿蘇は世界最大の東西18km、南北24kmのカルデラを有する典型的な活火山である。そのカルデラ(鍋を意味する)内に6町村があって約5万人が居住しているという。

一方桜島の親、始良カルデラ(東西23km、南北17km)及び阿多カルデラ(東西26km、南北15km)、これらのカルデラ式火山が噴発し地底を空虚にした。その陥没で鹿児島湾地溝ができ上がった。それはかつて霧島火山まで続いていた。此のような地溝のへりに53万人がへばりついている鹿児島市。それはまた、県

の西半分、10個の地形区に分けられる薩摩地疊の中の赤崩<sup>あかぶち</sup>地塊に属し、その山体はトロイデ型火山丘で中腹以下にシラス台地を形成している。此の南北凡そ60kmに及ぶ錦江湾（鹿児島湾）にたたえられた海水が200m以上の海底にねむる火口底、海底を隠して、おだやかな景観をつくりあげる。

エクメーネ（人間居住地域）という観点からは興味ある位置づけが鹿児島市に与えられるだろう。一般に火山に対する印象は荒々しいものであったり、登山の対象であったりする。そして観光資源としては都会とは隔離された存在として意識されている。此の一般的な火山に対する態度と比較する時、鹿児島市の特殊性というものは強く印象づけられるべきものであろう。地溝のへりにへばりついている人々は中央火口丘の桜島だけを火山として認めているのであって、足下の大地の火山性を日常的な生活の中に決して感じてはいないのである。海水をたたえた、大鍋、カルデラにかかわる景観は、都市の成立と共生して、おだやかに存在している。颱風や梅雨時の厳しさはあるとしても、南国特有の温暖さといまわって、これらの大スケールの景観は、視覚上、こよないアメニティをこのエクメーネに与えているのである。

鹿児島市近傍のシラス台地、それは始良カルデラによる火砕流がもたらした熔結凝灰岩の非熔結部、シラスと一般に言われる、火砕流堆積物が造る台地である。鹿児島を海岸線と直交する断面（略東西方向）に見ると、1）東部の造成された人工平坦地、2）その西側に在来の市街地、それはシラス台地の谷底平野、海岸平野、そして三角州上に位置している地域、3）在来の市街地の平面から所により数十メートルの段差をもって立ちあがり西方に広がるシラス台地、これら三部分の地形

の成り立ちを此の都市の中に見わけることができる。3）のシラス台地には第二次大戦後の宅地造成によって市の人口の半数近くが住みついている。1）の人工平坦地は、工業地域、一部商業地域でそれらの施設を収容したサイトには、ほぼ全海岸線にそってのウォーターフロントが日常の市民活動とは無縁に機能付けされて形態化されている。こゝまでは最初の辞書による分類のI）、II）に関する見方を述べてきたことにならうか。

次に今までのマクロな視点から、都市と田園、街並みあるいはかいわいと言われる人間の眼の高さから日常の生活圏を見渡す尺度へ移ることにしよう。此の尺度に至ると此の都市、エクメーネとそれに関する前期のマクロな自然との共生のアメニティは一挙にかき消されてしまう。此の都市の持つ地勢の特徴の代表は先程の断面において不連続を読みとらせるシラスの急崖である。従ってそれが此の都市についての造形的主因となると私は判断している。此のシラスの景観に関する性質を知る必要がある。シラスの崖は屢々、崩壊して大きな災害を招く。溶結凝灰岩の非溶結部であるシラス、平常その組織は粒子間の結合を保って形態上、安定しているが水を多く含むとその結びつきが解かれて、一挙に崩壊へと向かう。此の急崖がその垂直に近い形態を保つのは、まさにその垂直性によって降雨からの吸水を最少限に押え、その上部の植被によって急激な水分の吸収を避けているという二つの条件によっている。

生活圏を感じる尺度における、このエクメーネとマクロな自然との共生のアメニティの不在は前述の三つの地域についてそれぞれに見られる。1）の人工平坦地におけるウォーターフロントが日常生活圏との関連を欠いた構造になっていることは既に述べた。3）の

シラス台地上の宅地造成を見ると、凡そ1,200 ha 余 (58年12月現在) がすでに造成されているが、その地域の単調さは第一種及び第二種住居地域に限定されていること、次に第一種地域の占める不動産的経済性が生み出した独立家屋を支える一区画が約260m<sup>2</sup>程度であること、これは造成後の緑を確保する自然回復には不十分な区画単位で、それがすべての造成地に万遍ない均質性を保っているのも、その視覚的アメニティの欠如は指摘するまでもない。むしろ既成市街地の現状は生活圏の複雑な色どりに支配されて活気を帯びている。然しながら、何れにしろその人工景観には他の同等の規模をもつ都市との差異を特徴づける何ものも持たない。

かつて人間が住む所にあった意味のある空間は近代化の都市現象の中で殆ど失われてしまったと言ってよい。あるのは唯効率だけを追求する諸事項、都市の衛生化に対する処置、交通渋滞を解消するアスファルトの大道路網、水はけの放水路と化した河川。

昔、都市は囲われることによって秩序ある中心として存在し、その外側はカオスの世界として対比をなしていた。そして、そこを横切ることの障碍、都市の壁に直面してそれを回避することが、移動する人、旅する人のテリトリーをひろげて行った。決して囲われた内部だけが一つのテリトリーを保つという一面的な状態を維持するだけではなかった。ここに囲いの両義性、排除と媒介が同時に存在する。内なるコスモスと外なるカオスを敵対関係から融和へと導く仕掛け、排除を関係へ、触媒による化合へ、そこには建築が介在する。都市の城門、それに触発される壁の内外の市場等々。これこそが建築的スケールの分節化がもたらす異質のテリトリー間への介入の意義のある相貌である。それらが人々の記憶の

中に二つの世界の間の記念碑的作用を構築して行った。これはあくまで牧畜民世界が獲得した図式かも知れない。農耕民族の我々には都市的スケールにおける囲いという観念は薄弱というより皆無であったのかも知れない。しかし、囲いが造り出すパラドックス、排除と媒介という機能、それを融和させる建築的空間の介入、それらは我々に大きな示唆を与えて呉れよう。

話を鹿児島に戻そう。此の都市の地形的特性をきわだたせる手法で都市の機能もまた統合させることができないか。そのために読み取られる二つの要素は南北に延びるウォーター・フロント、それに略々、平行して西側を走る都市域内の10km以上に及ぶシラスの急崖であろう。それは水平面から直角と言える立ち上がりを見せているので垂崖と呼ぶにふさわしい。これはまた建築的スケールで都市機能の中に分節化し得る対象でもある。垂崖はその垂直性と上部の植被によって崩壊を免れているとは言え垂直面に根付く植物の根幹が強風にゆすられて崖は崩れ去ることもある。凡そ100年のオーダーで崩壊による垂崖面の後退は避けられないとも云われる。垂崖の脚下の崩落による緩傾斜上、災害発生地帯にも細街路を伴う高密度の住宅地が存在している。それらを含んだ垂崖下の10km余の帯状地帯をリスベクト・ゾーンとする。また垂崖の切りくずしによる斜面造成地を造らない。此の二つのことによって地形の特性とその地帯の安全は保たれる。

1960年代末に始まる造形世界の行為、ランド・アート、それは大自然、グレート・ソールト・レークに防波堤を、<sup>(1)</sup>ネヴァダ砂漠の表面に何マイルもの線<sup>(2)</sup>を引く造形的行為であった。自然を相手に形態を創造する。それは身近にあるシラスの垂崖にとっても充分受け容

られる手法である。はじめに形ありき、そこに都市内の機能としての何ものかを附加する。此の操作が、大自然との共生のアメニティの記憶を呼びさまし、日常性のある、生活圏域に都市のアメニティをスピリチュアルに、ファンクショナルに視覚化されたものとして受け容れさせる素地を出現させる。これこそ他の都市にない形であり機能であろう。

これらのことを是認するには冒頭に掲げた第IVのアメニティが必要である。その地域の特性を学術的な対象として受容する快適な市井の人々のメンタリティ。専門家も彼の専門を外れた領域では日常的な智慧で物事を考えるという認識が誰にも養われることである。専門家も市井の一員として考えられることで、エクメーネを構成するすべての人々の間にアメニティが醸成される。それは視覚化されない心に宿るアメニティである。

#### 参考文献

鹿児島県自然 鹿児島県理科教育協会 1964年  
シラス台地研究第1号 シラス台地研究グループ  
1980年8月

九州地方 新日本地誌ゼミナールⅦ 藤岡謙次郎  
監修 大明堂 1983年

近代の美術 エドワード・ルーシウスミス 講談社  
1976年

エスノメソドロジーとは何か K・ライター 新曜社  
1987年

〔註〕(1) ロバート・スミソン作 防波堤の渦  
巻 1970年

(2) ウォルター・デ・マリア作 ラスベガ  
スの一画 1969年

#### 著者略歴

氏名：Hiromichi Matsui

学歴：東京芸術大学美術学部建築科 1956年3  
月卒業 芸術学士

イタリア国立パレリモ大学建築学部 1976  
年3月卒業 Architetto

職歴：剣持勇デザイン研究所所属(1956年～1969  
年)

建築家 V. Gregotti に師事(1967年10月)  
有限会社グレゴッティ・アソチアーティ設  
立(イタリア国ミラノ市) 役員(1973年5  
月～1982年7月)

鹿児島大学教授工学部建築学科計画講座  
(1983年4月より現職)

九州芸術工科大学非常勤講師(1984年～)

著書・賞・研究例等：イタリア国パレリモ市 ZEN  
住宅団地国内競技設計優勝(共同)(1970  
年)

フィレンツェ大学(イタリア国) 国際競技  
設計優勝(共同)(1971年)

カラブリア大学(イタリア国) 国際競技設  
計優勝(共同)(1973年)

V. Gregotti 著「イタリアの現代建築」訳  
書(鹿島出版会)(1979年)

パリ・レアル地区整備計画(フランス国)  
国際競技設計入選(共同)(1980年)

ベルリン・ルッツォフストラッセ地区集合  
住宅(西ドイツ国) 国際招待競技設計2等  
入選(グレゴッティ・アソチアーティ)(1980  
年)

遣唐使館(コミュニティーセンター) 坊津  
町(共同)(1987年)

美しいまちづくり推進事業下飯村手打地区  
整備計画調査報告書(共同)(1987年)

美しいまちづくり推進事業開聞町整備計画  
調査報告書(共同)(1988年)

委員：鹿児島県環境保全審議会委員(1984年～)  
鹿児島県建築審査委員(1987年～)